

# 子供の時分の話

小川未明

青空文庫



あめ売りの吹く、チャルメラの声を聞くと、子供の時分のことを思い、按摩の笛の音を聞くと、その人は涙ぐみました。その話を聞かせた人は旅の人です。そして、その不思議な話というのはつぎのような物語です。

\* \* \* \* \*

町からすこしばかり離れた、小さなさびしい村でありました。村には昔の城跡があり、まじつ。ちようど私と同じい七つ、八つばかりの子供が、毎日五、六人も寄り集まつて鬼事をしたり、こまをまわしたりして遊んでいました。

ずっと以前から、この村に一人のあめ売りじいさんが入つてきました。チャルメラを吹いて、小さな屋台をかついで町の方からやつてきました。子供らはみんな、このおじいさんの顔をよく知っていました。

私は、昼寝をしている時分に、夢の中でこのチャルメラの声を聞いたこともあります。また外に遊んでいる時分に、あなたの往來にあたつて聞いたこともあります。

木の葉が風に光つていたり、とんぼが飛んでいるのを見るよりほかに、変化のない景色は物憂く、単調でありましたから、たまたまあめ売りの笛の音を聞くと、楽しいもの

でも見つかったように、その方へ駆けていったものです。

このあめ売りじいさんは、城跡の入り口のところに、いつも屋台を下ろしました。そして、村じゅうの子供を呼び寄せるように、遠方を望んで、チャルメラを吹き鳴らししました。じいさんは、もういい年であったとみえて、目のしよぼしよぼとした小じわのたくさんな顔が日に焼けて、黒い色をしていました。

けれど、私は、またこんな無愛想なじいさんを見たことがありません。多くの子供が、こうしてなつかしように、慕わしうにそのそばへ寄つてきましても、つい一度として笑つた顔も見せなければ、戯談をいつて喜ばせてくれたこともなかったのです。

こうして、そこに二、三十分も屋台を下ろして休んでいますが、もうあめを買つてくれる子供がいよいよないとわかると、じいさんは黙つて屋台をかついで、お城の中を通つて、かなたの村の方へといつてしまいます。私は、いつもさびしうにして、おじいさんの消えてゆく姿を見送りました。

昔からある、城の門の四角な大きい礎石は、日の光を浴びて白く乾いていました。草は土手の上にしげっていました。そして、小鳥は四辺の木々のこずえに止まってないまま。北の方から、悲しい風が吹いてきて、ほおをなでたのであります。

「さあ、家の方へ帰ろうよ。」と、友だちの一人がいいますと、

「ああ、帰ろう。」と、みんながいつて、家のある方へと帰っていきました。

「君、河へ泳ぎにいこうか。」と、中の一人がいいますと、

「ああ、泳ぎにいこう。」と、あるものは同意しましたけれども、また、あるものは、

「僕、河へいくとお母さんにしかられるから、いやだ。」と、ゆくのを拒んだものもあります。

「弱虫だなあ、じゃ、僕らだけ泳ぎにいこうよ。弱虫なんかこなくてもいいや。」と、

二、三人が、一つになって途中から別れて、田舎道を歩いて河のある方へといったのであります。

私は、いつもその弱虫の中に入っていました。私の祖母や母親が、河へいくことを危ないといつてきびしくしかったからです。そして、私はいつも弱虫の仲間に入つて、

家の方へと帰っていきました。

そればかりではありません。私の祖母や、母親は、私を家の前からけつして遠くへはやらなかったのであります。

「二人で、遠くへゆくと、人さらいがきて連れていってしまうから、家の前から遠くへい

つてはいけない。」と、つねにいいきかされていたのであります。

だから、遊ぶ友だちのない、ただ自分一人のときは、ぼんやりとして、日の当たる路の上に立っていました。そして、だれかいつしよに遊ぶ友だちが出てこないものと待っていました。

ある日のことです。私は、やはりこうして一人さびしく往來の上に立っていました。けれど、犬一匹きの姿を見せなかったのです。ただ路の上には、なにか小さな石が日に照らされて光っていました。そして、とんぼが、かなたの圃の上を飛んでいるのが見えたばかりです。

私は、退屈でしようがなかつたのです。このとき、遠くでチャルメラの音が聞こえました。私は、飛びたつように勇氣づけられました。いくらそのおじいさんが無愛想でも、ずっと昔からこの村にくるので、まったくの顔なじみであったから、けっして他人のようないきもちがしなかつた。そのそばへいつて、屋台にさしてあるいろいろな色紙で造られた小旗の風になびくのを見たり、チャルメラの音を聞こうと思ひました。また、きつとよそからも、友だちがそこへ集まってくるにちがいないと思つたので、私は、さつそく駆けだしました。

城跡しろあとのところにいきますと、いつもおじいさんが屋台やたいを下ろす場所ばしょに屋台やたいが置いてあります。そこからチャルメラの声こえが聞こえてきました。そして、今日はいつもより、紫色むらの紙かみの小旗こぼたがたくさんにちらちらと見えましてので、早くはや変わった光景こうけいをながめたいと走はしつていきました。

すると、それは、いつものおじいさんじゃありませんでした。私わたしは、このはじめて見るおじいさんを不思議ふしぎに思おもいました。おじいさんは、こつちを向むいて、にっこり笑わらっていました。そして、私わたしがだんだん不思議ふしぎに思おもいながら近ちかづくとき手招てまねぎをしました。そのおじいさんの顔かおは、白しろくて目めが光ひかっていました。私わたしは、このおじいさんが、いつものおじいさんちがと異ちがつて、愛あい嬌きようがあるのにもかかわらず、なんとなく気味悪きみわるく思おもいました。

「さあ、おいでよ、おいでよ。」と、おじいさんはいいました。私わたしは、自分一人じぶんひとりだけで、ほかに友ともだちがなかったから、あまり屋台やたいには近寄ちかよらずに、離はなれてぼんやりと立たつていますと、

「ここまできると、おもしろいからくりを見せてやる。さあさあ早くはやおいで、一人ひとりのうちはお銭あしをとらない。さあさあ、早くはやおいで。」と、おじいさんはいいました。私わたしは、からくりを見みたさに、だんだんと近寄ちかよつていきました。

「さあ、その孔あなからのぞき。第一だいは姉あねと弟とうととが、母親ははおやをたずねて旅立たびだつところ。さあさあのぞき。一人ひとりのうちはお銭あしを取とらない。」

私は、屋台やたいにかかっている箱はこの孔あなをのぞいてみました。すると、旅姿たびすがたをした姉あねと、弟おとうとの二人ふたりが目めに映うつつたのであります。

「つぎは、途中とちゆうで、二人ふたりが悪者わるものに出であうところ。」

と、おじいさんがいつて糸いとを引ひきますと、青あおい、青あおい、海原うなばらが見みえて、怖ろしい姿すがたをした悪者わるものが、松まつの木の蔭かげに隠かくれて、かなたから歩いてくる二人ふたりのようすをうかがっていました。

これから、どうなることだろうと思おもっているうちに、おじいさんは孔あなの中なかを真まつ暗くらにしてしまいました。

「さあ、これから二人ふたりが、人買ひとかい船ぶねに乗のせられて沖おきの島しまへやられるところ、もつと先さきまでいくと見みせますよ。さあ、いつしよにおいでなさい。」と、おじいさんは屋台やたいをかついで、お城しろの中なかへ入はいつていきました。

私は、悪者わるものが、姉あねと弟とうとをどんなめにあわせるだろうと思おもうと、かわいそうになつて、ついそれが見みたくて、あめ売うりの後あとについていきました。あたりはまったく圍はたけで、人ひと一ひと

人通らなかつたのであります。

不意に、おじいさんは屋台を下ろすと、私を捕らえました。私はびっくりして声をたてる暇もなく、おじいさんは私の口に手ぬぐいを当て、もののいえないようにして、

「いいところへ連れて行ってやるから、おとなしくして、この箱の中に入っているのだ。」と、私を箱の中へ入れてしまいました。それをかついでおじいさんは、とつとと途を歩いていきました。

狭い、身動きもできないような真つ暗の箱の中に押しこめられて、私はしかたなくじつとしていました。おじいさんは、どこを通っているのだからわかりませんでした。その後はチャルメラも吹かずに、さつさと歩いていました。

「あんまり、一人で遠くへゆくと、人さらいに連れられて行ってしまふ。」といった、祖母や母親の言葉が思い出されて、私は、しみじみ悲しくなつて泣いていました。

おじいさんは、どこをどう歩いているのだから私にはわかりませんでした。だいぶん長い間歩いたと思う時分に、おじいさんは屋台を下ろしました。そして、箱の中から私を外に出しました。このときよく見ると、おじいさんの顔は、まったく気味が悪いほど色が白く、目が光っていました。私はいつも村にやってくる無愛想な、あめ売りじいさんを思い出

して、どれほど、その人のほうがいいかしれないと思いました。

「さあ、なんにも怖いことはない。私といつしよにくるのだ。」と、おじいさんは、屋台を木の下に置いたまま先に立つて歩きました。私は、そこがどこだか、ちつともわかりませんでした。さびしい山の間で、両方には松の木や、いろいろな雑木のしげった山が重なり合っていました。そして、ただ一筋の細い路が谷の間についていました。

おじいさんについて、どんなところへ連れていかれるのかと心配しながら歩いてゆくと、はや、せみの松林で鳴いている声が聞こえました。日が暮れたら、どうなるのだろうかと思うと、もう一足も歩く気になれなかつたけれど、路がわからないので逃げ出すこともできなかつたのであります。お母さんや、おばあさんが、私をたずねて、心配していなさるだろうと思うと、私は胸がふさがるように気がしました。

「さあ、この峠を越すと、もうじきだ。」と、おじいさんはいきました。

どんなところへゆくのだろうと、私はそればかり思われて、心配でなりませんでした。やがて峠を越すと、三、四軒の古い粗末な家が建っていました。おじいさんは、その一軒の家に私を連れて入りました。すると、そこには肌ぬぎになって、大男が四、五人で、花がるたをしていました。そして、大きな目をむいて、けんめいにかかるたをとって

ました。

「こんな子供をつれてきた。」と、おじいさんは、みんなに向かつていいました。けれども、だれも相手にならず、かるたのほうに気を取られて夢中になっていました。

「どれ、湯に入つてこよう。」と、おじいさんはいつて出てゆきました。

そこは沸かし湯の湯治場であつたのです。私はひとりすわつて、このものすごい室の内を見まわしていました。まだランプも、電燈もなく、ただ古ぼけた行燈が、すみのところろに置いてありました。私は心で、これはきつと悪者どもの巢窟であると考えました。そして、この間に逃げ出さなければならぬと思ひました。私は、よくそのときのことを覚えています。このとき、按摩が笛を吹いて家の前を通りました。

私は決心をして、男どもに氣づかれぬように、そつと室を出て、下駄をはきました。

そして、だれか見ていぬかと四辺を見まわしますと、勝手もとのところで、まだ若い女が、白い手ぬぐいをかぶつて働いていました。私は、その女の人がなんとなくやさしい人に見えましたので、そのそばへいつて、

「小母さん、どうか私を家へ歸しておくれ。」と、泣いてたもとにすぎりました。すると、やさしそうなその女の人は、じつと私の顔を見ていましたが、

「知れるとたいへんだから、早く私におぶさり、あのおじいさんのいないまに逃げなければならぬから。」と、女の人はいって、白い手ぬぐいをとって、その手ぬぐいで、私の顔をわからないように隠しました。私は、目をふさがれて、女の肩につかまり、その脊におぶさりますと、女はすぐにそこから音のしないように歩き出して、きたときの峠を下りました。

やがて女は二、三丁もくると、息をせいて、私を下ろして休みました。けれど、まだ私の目から手ぬぐいはずしませんでした。

「わたしは、みんなに知れるとひどいめにありますから、ここから帰りますよ。坊ちゃんは、いまあつちからくる馬方に頼んであげます。」と、女は行って、ガラガラと馬に車を引かせてきた馬方に、なにやら小声で女は行っていました。

「また、達者だったら坊ちゃんに会いますよ。けれど、だれかがとってくれるまで、一人で手ぬぐいをとってはいけませんよ。」と、女はいいました。私は、黙ってうなずきました。そしてなんとなく、このやさしい女に別れるのが悲しゅうございました。

私は車の上に乗せられて、長い間、知らぬ街道をガラガラと引かれていたのであります。どんなところを通ったか、どんな景色であったか、目を隠されているので、すこし

もわからなかったのです。そして、あるところにきたときに、

「ここだ。」といって、馬方は車を止め、

「さあ下りた。そして、すこしここに立って待っているのだ。」といって、私を抱き下ろしてくれました。

私は、いわれるままに立っていました。そのうちに馬方は、馬を引いて行ってしまいました。ガラガラと車の音は、しばらく遠くなるまで私の耳に聞こえていました。

いつまで待っても、いつまで待っても、だれもきてくれなかったのです。私は、ついに悲しくなって泣き出しました。大きな声をあげて泣き出しました。すると、だれかきて、私の目かくしを取ってくれました。

見ると、それは私のおとうさんで、私は村はずれの大きな並木のかげに立っていました。日は、もうとつくに暮れていたのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年7月

※表題は底本では、「子供《こども》の時分《じぶん》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 子供の時分の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>